

平成10年度日本臨床外科学会賞を受賞
学会総会(広島市)で受賞記念講演「生涯現役で」と決意も

呉出身で、消化器のガン治療の権威である三浦 健・三浦病院院長が平成10年度の日本臨床外科学会賞を受賞し、平成10年11月中旬、広島市の広島国際会議場で開かれた同学会総会で、「ガンの動脈内注入化学療法--35年の経緯から」と題して受賞記念講演を行った。

この分野の治療法のパイオニアである三浦さんは「身にあまる光栄です。これからも頑張ります」と語った。

同学会(会員数17,000人)は、全国の臨床外科医の中で、臨床外科学の進歩や地域医療に貢献した医師を毎年1名選んで表彰しているが、平成10年度は三浦さんが選ばれた。受賞の理由はガンの局所療法の一つである動脈内に抗ガン剤を注入してガン細胞の増殖を抑える研究と治療方法の実績が認められた。

記念講演で三浦さんは、米国・レイヒークリニック留学中の昭和38年に初めて参加した動脈注入ポンプの研究に始まり、現在までの研究と臨床の経験、知識、データを分析、説明した。

「肝細胞ガンでは80%の症例で効果が認められるが、肝硬変の悪化で死亡する例が多い。また、肝細胞ガンだけでなく転移性肝ガンや、膵臓ガンや乳ガンでも著しくガン細胞増殖を抑える例が多いが、体内に抗ガン剤を注入するためのポンプを埋め込むポートシステムを用いて長期に薬剤を投与することで、この手法の治療成績は一段と向上してきた」と結論づけた。

抗ガン剤は全身に投与した場合、副作用が強い割には効果は少ない。その代わりに、動脈に管を入れて患部に集中的に注入するミサイル療法では50～100倍も抗ガン剤の濃度が高まり、効果が大きいという。